

## ロビンソンと貧困化の問題

三 谷 友 吉

は し が き

ジョーン・ロビンソンはマルクス経済学についていくたの著書や論文を公にしているが、もつともまとまつてい  
るものは『マルクス経済学にかんする一試論』(一九四二年)である。この書物についてはわが国においてもすでに  
多くの紹介や論評がなされているのであるが、われわれはロビンソンじしんの長期発展の理論へのひとつの準備的  
労作としてそれをとりあげ、他の諸論文をも参考して、彼女のマルクス研究の成果を検討してみたい。

『一試論』は、第一章「序論」、第二章「定義」、第三章「労働価値説」、第四章「雇用の長期理論」、第五章  
「利潤率の低下」、第六章「有効需要」、第七章「正統派の利潤論」、第八章「雇用の一般理論」、第九章「不完  
全競争」、第十章「実質賃銀と貨幣賃銀」、第十一章「動態分析」よりなるが、第二章から第六章までは、現代ア  
カデミック経済学者の観点からみた、マルクスの議論の輪廓をふくむ。第七章はマルクスの理論を正統派の学説と  
対照し、雇用および不完全競争にかんする第八章と第九章は、現代のアカデミックの学説が正統派からはなれてマ  
ルクスの方向にいつた動きをしめす。賃銀論にかんする第十章は反対の方向への動きがあつたところの問題を論じ  
ている。この場合にかぎりマルクスは現代的視点からすれば正統派陣営にあるかのようにみえる。第十一章は三つ

のすべての流派がのこしている未解決の問題を簡単に列挙している。<sup>(1)</sup>

ロビンソンのマルクス研究の成果、あるいはマルクス経済学にたいする批判をしるためには、とくに第二章から第六章までが重要である。（なお第十章にも注目すべき批判がみいだされる。）

ロビンソンは第一章「序論」の冒頭において正統派経済学<sup>(2)</sup>とマルクス経済学との根本的相違すなわち資本主義観の相違について論じ、ついで前者の非歴史的な方法と後者の歴史的な見方に論及し、とくに正統派経済学者の抽象的な理論にするどい批判をくわえたのち、つぎのようにのべている。「マルクスは、景気循環の週期的恐慌を、資本主義体制の生活器官における根ぶかい、進行性の疾患の徴候とみている。マルクスの時代以後におこつた経済分析の発展によつて、われわれはマルクスの恐慌論の扱い方のなかに三つの異つた思想の糸をみつけだすことができる。第一は失業労働の予備軍の理論である。これは労働に雇用をあたえる資本存在量と雇用にもちいられる労働の供給量との関係とともにいかに失業が変動する傾向をもつかをしめすものである。第二は利潤率低下の理論である。これは資本家の蓄積欲が資本の平均収益率を減少させることによつていかに逆効果をもたらすかをしめす。そして第三は資本財産業と消費財産業との関係の理論である。これは、ますます増大する社会の生産力が、労働者の貧困によつてあたえられる消費力の制限にぶつかることをしめすものである。マルクスの考えでは、これら三つの理論がはつきり区別されておらず、それみずからの固有な矛盾になやまされ、自壊の条件を醸成する〔資本主義〕体制についてのひとつの画像のなかに融合されている。<sup>(3)</sup>」

このようにロビンソンは近代的な経済分析の視点からマルクス恐慌論の扱い方にかんねんして三つの理論をとりだし、そしてそれらを右の順序で考察しようとするのである。かかる見方、かかる考察の仕方それじたいが問題と

なるであろうが、しばらくおこう。ともかくもロビンソンは第二章「定義」、第三章「労働価値説」につづく三つの章において右の三つの理論をそれぞれ考察しているのである。

本稿においてはロビンソンが「雇用の長期理論」のなかでふれている貧困化の問題を中心として彼女の議論を検討することとする。それからさらに稿をあらためて利潤率低下の法則にかんする彼女の見解をも吟味したい。これらの問題または法則がマルクス経済学のなかでもっとも重要な位置を占めていることはいうまでもないが、ロビンソンの長期発展の理論においても賃銀と利潤との関係が主要な問題とみなされているのである。<sup>(4)</sup>

註(1) Joan Robinson, *An Essay on Marxian Economics*, reissued 1947, p. 5. 戸田武雄・赤谷良雄訳六一―七頁。

(2) ロビンソンはいわゆる正統派経済学の範囲をあまりかたにしていないので、G. F. シヤツの「ミスミス、リカアドウ、ミルを援用する批判をうけた。(G. F. Shove, Mrs. Robinson on Marxian Economics, *Economic Journal*, April 1944, pp. 50 ff.) しかしロビンソンは正統派経済学とどうも主としてケインズの『一般理論』よりもまたあらわれた近代経済学者の諸学説をかんがえているようである。

(3) Robinson, *op. cit.*, pp. 3-4. 訳書四―五頁。

(4) Cf. Robinson, *The Accumulation of Capital*, 1956, p. 70.

ロビンソンは『一試論』第四章「雇用の長期理論」のなかで労働予備軍(産業予備軍)についてのべ、労働力の価値にふれたのち、いわゆる絶対的貧困化の問題に論及している。ここではまず彼女が労働予備軍についてのべているところをみることにしよう。

ロビンソンは労働予備軍の発生についてつぎのように叙述している。「いかなる時点においても、雇用量は、存

在する資本の量と生産の技術とに依存している。時の経過とともに、資本は蓄積され雇用量は増加する傾向がある。また人口の自然増加や資本主義の新領域への前進——これによつて生活の手段をうばわれた小農民や手工業者の流れが、労働市場にそそこまれる——にともない、利用しうる労働は増加する。正常的に一部の失業せる労働者——労働予備軍——がいる。生産量の限度は、労働の完全雇用によつてでなく、資本設備の完全能力によつてきだめられる。<sup>(1)</sup>

これによつてロビンソンはマルクスが『資本論』第一巻第七篇第二十三章「資本制蓄積の一般的法則」のなかでのべている産業予備軍の累進的生産にかんする議論を要約したつもりであろう。しかしそれはマルクスじしんの見解とはだいぶちがつているようである。すなわち、ロビンソンは、主として、資本の蓄積による雇用量の増加と人口の自然増加にともなう利用しうる労働量の増加との関係から、くわしくいえば後者が前者よりも大きいことから、産業予備軍が生ずるとかながえているのである。<sup>(2)</sup>しかしマルクスによれば、産業予備軍は、資本の有機的構成の高度化によつて、人口の自然増加の制限から独立して発生する相対的過剰人口である。それは可変資本すなわち労働人口の雇用手段の増加よりも労働者人口の絶対的増加がつねに急激であることによつて生ずるのではない。ただ外観上そうみえるにすぎない。<sup>(3)</sup>事実は逆である。マルサスでさえもいう、一國はつねにその労働ファレドが人口よりも急速に増加するということに直面する、と。<sup>(4)</sup>それだからこそ、資本構成の高度化によつて労働者の相対的過剰人口をたえずつくりだすことが、資本制蓄積の一必然となるのである。「資本制生産にとつては、人口の自然増加によつて提供される自由に処分できる労働力の分量だけではけつして十分でない。資本制的生産の自由な活躍のためには、この自然的制限にかかわりのない、産業予備軍が必要である。<sup>(5)</sup>」けだし「生産規模の突然かつ断続的な膨

賑は、その突然な収縮の前提である。後者はふたたび前者を惹起するが、しかし前者は、自由に処分しうる人間材料なくしては、人口の絶対的增加にかわりない労働者の増加なくしては、不可能である。この増加は、労働者の一部分をたえず『遊離』させる簡単な過程により、就業労働者数を生産増加に比して減少させる諸方法によつて、創造される。つまり、近代の産業の全運動形態は、労働人口の一部分の、失業者または半失業者へのたえざる転化から生ずる。<sup>(6)</sup>」

かくてマルクスによれば、産業予備軍は資本の有機的構成の変化そのものによつて発生するのであるが、ロビンソンはそれをたんに資本の不足のために生ずるものと混同する。したがつて、それはむしろ資本の不足せる後進国においてあらわれるとかんがえるのである。すなわち、彼女はいう、「この型の失業は、世界の全体をとつてみた場合、もつとも重要な現象である。それは東洋の後進的な、人口過剰の国々において、またもつとも発展した諸工業国をのぞけば、事実いたるところに存在している。」かくして、ロビンソンにあつては、この種の失業は、有効需要の不足にもとずき、発達した工業国において生ずる失業とはまったくことなるものとして、後者に対立せしめられるのである。<sup>(7)</sup>

さらにロビンソンは賃銀の変動について説明している。いわく「このような事情では、実質賃銀の水準は、一階級としての資本家と一階級としての労働者とのあいだの交渉力によつて決定される。労働者は団結しないかぎり無力であり、かれらが得ることのできるものにあまじなければならぬ。それゆえに、賃銀は、生存水準によつてきだめられる最低限までおしきげられる傾向がある。……労働者たちの無力の状態は産業予備軍のためである。失業があるかぎり、労働者たちの交渉力は慢性的によわい。しかし資本の蓄積はしじゅうつづけられている。そして、

ある時期になると、提供される雇用量を左右する資本存在量が労働供給においつく。そうすると労働者の交渉する立場が強化され、実質賃銀は上昇する傾向をもつ。その結果、利潤は低下し、資本の蓄積率は人口の増加にくらべてのろくなる。したがって予備軍はふたたび増大する。その間、低い利潤率にがまんできない資本主義体制は、労働を節約するあたらしい技術を採用してこれに反撥する。高賃銀の刺戟によつて、労働を節約する發明がなされる。したがつて、それからのちは、一定の資本量は、より少い雇用を提供する。かくして労働予備軍は技術的失業によつてさらに補充されてゆく。そのうえに、資本主義をあらたな領域へ拡大し、搾取すべきあたらしい労働をみつげだすためのあたらしい動機が存在する。一時的につよくなつた労働者の交渉力はこのような手段によつて破壊され、そして実質賃銀はふたたび低下する。<sup>(8)</sup>」

ロビンソンはここでも資本の蓄積率と人口の増加との関係から産業予備軍が増減するとのべている。そしていわゆる技術的失業は補充的な作用をなすにすぎないとかんがえている。またロビンソンは、右のような考え方に照応して、資本家が、実質賃銀の上昇に対抗するため労働節約的な機械などを採用し、その結果として雇用が減少する場合を、とくに強調しているのである。たしかにマルクスもかような場合について論じている。<sup>(9)</sup>しかしながら、これは、たんに高賃銀の刺戟だけではなく、さらに重大な刺戟が存在することをくりかえし主張しているのである。すなわち、マルクスによれば、競争戦は各資本家に「あらたな機械、あらたな改良された作業方法、あらたな組合せの充用によつて自分の総生産物の個別的価値を一般的価値以上に高めるべき刺戟、すなわち一定分量の労働の生産力を高め、不変資本にたいする可変資本の比率を低下させ、かくして労働者を遊離さすべき刺戟、要するに人為的過剰人口を創造すべき刺戟」をあたえる。<sup>(10)</sup>そして繁栄時代を除外すれば、かかる競争戦が猛列をきわめるときが

ならずやつてくるのである。(11)

マルクスによれば、かくして生ずる相対的過剰人口としての産業予備軍の変動によつて、賃銀の運動が支配されるのである。すなわち「労賃の一般運動は、もつぱら、産業循環の週期的変動に照応する産業予備軍の膨張および収縮によつて調整されている。だから、それは、労働者人口の絶対数の運動によつて規定されているのではなく、労働者階級が現役軍と予備軍に分裂する比率の変動によつて、過剰人口の相対的な大きさの増減によつて、過剰人口がときには吸収されときにはふたたび遊離される程度によつて、規定されているのである。」(12)

註 (1) Robinson, An Essay, pp. 29-30. 訳書四一—四二頁。

(2) ロマンソンの見解下ひらひはなきを参照せよ。Robinson, Collected Economic Papers, 1951, p. 169; ditto, The Rate of Interest and Other Essays, 1952, p. 145. 大川一司・梅村又次訳一七七頁。

(3) Karl Marx, Das Kapital, I. Bd., Dietz Verlage, 1955, S. 663-664. 長谷部文雄訳(青木文庫)第一部九七六—九七七頁。

(4) Marx, a. a. O., S. 668. 訳書九八三頁。

(5) Marx, a. a. O., S. 669. 訳書九八四頁。

(6) Marx, a. a. O., S. 667. 訳書九八一—九八二頁。

(7) Robinson, Collected Economic Papers, p. 141.

(8) Robinson, An Essay, pp. 30-32. 訳書四二—四三頁。

(9) Marx, a. a. O., S. 672-673. 訳書九八八頁。

(10) Marx, Das Kapital, 3. Bd., S. 283-284. 訳書第三部三六九頁。

(11) Marx, Das Kapital, I. Bd., S. 476. 訳書第一部七二八頁。

(12) Marx, a. a. O., S. 671. 訳書九八七頁。

## 一

さてつぎにロビンソンの労働力の価値にかんする見解をみるに、彼女はある脚註においてつぎのように書いている。「マルクスの最初の賃銀理論の方式化はまったく独断的なものである。労働力は、他の商品のように、その価値において売られるかたむきがある。そして、労働力の価値は、労働者とかれにとつてかわる子供の生存資料を生産するに必要な労働時間である。この生存水準は『歴史のおよび精神的な要素』をふくんでいる。なぜならば、それは一部分は『自由労働者の階級が形成されたときの慣習や快適の程度』に、すなわち、資本主義が小農民を収奪し、『自由労働者』にしてしまう以前におこなわれていた生活水準に依存しているからである。……マルクスが生存賃銀の決定における『歴史のおよび精神的』要素に言及していることは、労働〔力〕の価値が資本主義の発展にともない慣例的な生活標準とともに上昇する傾向があるという意味にしばしば解釈される。わたくしはこのような解釈にたいするいかなる根拠をもみいださない。そしてもしもこの解釈が採用されるならば、それはマルクスの議論を循環論法におとし置いてしまう。なぜならば、それは実質賃銀が労働力の価値を決定するということを意味するからである。」<sup>(1)</sup>

すなわち、ロビンソンによれば、マルクスは、労働力の価値が「歴史のおよび精神的」要素にも依存することをみとめているが、しかし労働力の価値が資本主義の発展にともない上昇するものと解釈することはできないというのである。だから、「自由労働者の階級が形成されたときの慣習や快適の程度」に依存する労働力の価値がずつとつづくものとみなされる。<sup>(2)</sup>



しかしマルクスじしんそういうふうにかんがえていたであろうか。かれは『資本論』第一巻第二篇において、勞働力の価値を規定する基礎となる勞働者の必要生活資料の範囲が、勞働者の自然的欲望すなわち食物、衣服、煖房、住居などのような欲望のほか、必然的欲望にも依存するとなし、そして「い、わ、ゆる、必、然、的、欲、望、の、範、圍、は、その充足の仕方とおなじように、それじしんひとつの歴史的産物であり、したがつてまた大部分は一国の文化段階に依存するのであり、なかんづくまた本質的には、いかなる条件のもとで——したがつていかなる慣習や生活要求をもつて——自由勞働者の階級が形成されたかに依存する」ということをのべているが、『實銀、価格および利潤』のなかではこのことについてつぎのように説明している。すなわち生理的要素のほか、勞働〔力〕の価値はどこ<sup>(3)</sup>の国でも伝統的な生活水準によつて決定される。それはたんなる生理的な生活ではなく、ひとびとがそのもとにおかれかつそのもとでそだてられている社会的諸条件から生じる一定の欲望の充足である。イングランドの生活水準はアイルランドの水準にひき上げられ、ドイツの農民の生活水準はリヴォーニアの農民のそれにひき上げられひきさげることもできる。歴史的伝統と社会的慣習がこの点でえんじている重大な役割についてはソーントン氏の『過剩人口』にかんする著書から諸君のまなびうるところである。氏はこの著書で、イングランドのいろいろな農業地方における平均賃銀は、それらの地方が農奴制の状態から脱した当時の事情のよしあしにおうじて、こんにちでもなお多かれすくなかれことなつてい<sup>(4)</sup>ることをしめしている。

これによつてあきらかなように、マルクスは、自由勞働者の階級の形成されたときの慣習や生活要求にしたがつて、種々の国や一國の種々の地方における生活水準または平均賃銀が多かれ少かれことなつてい<sup>(4)</sup>ることを指摘しているのであつて、勞働力の価値が変化しないということ<sup>(4)</sup>を主張しているのではない。むしろ反対にかれはそれが歴

史的に変化することを強調しているのである。いわく「諸君は、種々の国での標準賃銀または労力〔力〕の価値を比較することにより、またおなじ国の種々の歴史的時代のそれらを比較することによって、労力〔力〕の価値そのものは——たとえ他のすべての商品の価値は不変のままであると仮定しても——固定的な大きさのものではなくて可変的な大きさのものである、ということを見られるであろう。」

かくてマルクスによれば、労力力の価値は変化しうるものであり、事情によつてはたかまるであろう。ロビンソンは、労力力の価値の上昇をみとめるときは、マルクスの議論は循環論法におちいるという。なぜなれば、実質賃銀が労力力の価値を決定することになるからである。しかしそのときにも実質賃銀が労力力の価値を決定するわけではない。労力力の価値は生理的要素のほかに歴史的または社会的要素そのものによつてさだまるのである。

ところで、マルクスは、労力者の必要生活資料の価値の変化によつて生ずる労力力の価値の変化から区別したものの、すなわち労力者の必要生活資料の大きさそのものの変化にもとづく労力力の価値の変化について、どのようにかんがえていたのであろうか。かれによれば「労力力の日価値は、……労力力の標準的な平均的持続または労力者の標準的な生活期間にもとづいて、また運動への生命実体の相応で標準的で人間性に適当な転態にもとづいて、評価されるのである。」<sup>(5)</sup> だから、労力日が標準的なものをこえて延長されるならば、労力力の価値もたかまらなければならぬ。労力力の強度が平均以上に増大される場合においてもおなじであらう。

さらにマルクスの見解によると、「労力力の現実的価値は肉体的最低限から背離する。それは、氣候風土や社会的発展の状態やにおうじて相違する。それは、肉体的欲望に依存するばかりでなく、歴史的に発展した社会的欲望——これは第二の自然となる——にも依存する。」<sup>(6)</sup> すなわち、マルクスは、労力力の価値が社会的発展の状態、歴

史的に発展した社会的欲望にも依存することをみとめているのである。したがって、それは社会的欲望の発展にもなつてたかまることになるであろう。なおレーニンが欲望の向上の法則についてといているのは注目にあたいる。この法則は、資本主義の発展が全人口と勤労プロレタリアートの欲望水準の増進を不可避的にともなうということであつて、ヨーロッパの歴史のうえでは完全な力をもつてあらわれたのである。<sup>(9)</sup>

さいきんア・アルズーマニヤンは、生産力の発展につれて労働者とその家族の欲望が増大し、ますます多面的となり、そのかぎりにおいて労働力の価値がたかまるということを主張している。かれによれば、「労働者とその家族の必要とする生活手段の大きさと構成は、平均してみれば、ある一定の時代ある一定の国にとつて一定した大きさである。これらの生活手段の大きさと構成はたえず変化するが、そのばあい、国がちがうにつれていろいろに変化するのである。消費したいはある一定の生産関係によつて制約された歴史的範疇である。労働者とその家族のいわゆる必然的欲望はその欲望の充足方式とおなじように歴史の所産である。……若干の例をあげてみよう。労働者は、一九世紀のはじめには現在の都市にくらべて小さな都市に、あるいは工場のすぐそばに住んでいて、日々の交費というものをしらなかつた。ところが現代の諸条件のもとでは、この交通費は、労働者の家族にとつてかならず支出しなければならぬものとなり、労働力の再生産の必然的要素となつたのである。一部の国、たとえばアメリカでは、生産力が成長し、生活条件や労働条件が変化した結果、二〇世紀はじめのアメリカ労働者の家族はもたなかつた自動車を、買つたり使つたりする費用が、一部の労働者家族の家計費にふくまれるようになった。一九世紀はじめの労働者の欲望のなかには新聞ははいつていなかった。新聞は都市の小ブルジョアにとつてさえもいたく品であつた。二〇世紀はじめからは、発展した資本主義諸国の労働者家族は新聞なしにはすませないで、ラジオ受

信機やテレビジョン受信機を購入する必要まででできた。生産力の發展につれて、生活上の欲望、教育費が変化し、それにもなつて労働者とその家族の欲望が増大し、ますます多面的なものになる。したがつて、労働者とその家族に必要な生活手段の大きさと構成のうちには、ますます新しい商品やサービスがふくまれるようになる。そのことから、ある一定の時期にある一定の国で一定の大きさをもつ労働力の価値も歴史的に変化する、ということになる。そのさい、一面では、労働生産性の向上によつて労働力は安価となるが、他面では、労働力の再生産に必要なますます新しい商品やサービスが労働者とその家族の欲望の大きさにふくまれるために、労働力の価値はたかまる<sup>(10)</sup>。」

このようにアルズーマニャンは労働者の欲望の増大によつて労働力の価値がたかまることを強調しているのである。かれのあげている具体的な実例はともかくとして、右の意味における労働力の価値の上昇はみとめなければならぬであろう。

そしてアルズーマニャンによれば、労働力の価値と実質賃銀との相互関係が労働者階級の絶対的貧困化の問題においてなによりも重要なものである。けだし、労働力の価値以下に実質賃銀が下落することのうちにその貧困化があらわれるからである。かくて実質賃銀の動態は、労働者階級の経済的状态をしめす基本的な指標である<sup>(11)</sup>。

もちろん、たんに実質賃銀の水準だけから、労働者の状態のよいかわるいかを判断することはできない<sup>(12)</sup>。全体としての労働者階級の状態は、実質賃銀のほか、種々の労働条件や失業、半失業など、さまざまな事情によつて決定されるものである。だから、絶対的貧困化の問題においてはこれらすべての事情を考慮にいれなければならぬ。かくてアルズーマニャンもつぎのようにのべている。「実質賃銀の水準は、労働者階級の状態をしめす唯一の

指標ではない。プロレタリアートの絶対貧困化は、賃労働の諸条件の総体によつて条件づけられている。したがつて、絶対的貧困化を解明するためには、失業の動態、労働条件の変化、とくに労働の強化、厚生施設や社会保障や、医療施設などの変化をも、考慮しなければならぬ。<sup>(13)(14)</sup>」

註 (1) Robinson, An Essay, p. 36 footnote. 訳書四七頁註(7)。

(2) かくてロビンソンはある論文のなかでマルクスの見解としてつぎのようになってゐる。「実質賃金は、自由労働者の階級が形成されたとき、つまり資本主義が最初に農業的ないし手工業的生産にとつてかわつたときに、はじめ確立されたレベルを、長くは上廻つたまま維持されえないのである。」(都留重人・伊東光晴訳『J・ロビンソン マルクス主義経済学の検討』三〇頁。)

(3) Marx, Das Kapital, 1. Bd., S. 179. 訳書第一部三二〇—三二二頁。

(4) 『マルクス・エンゲルス選集』(大月書店刊)第十一卷九七—九八頁。

(5) 同上同卷九八頁。

(6) 同上同卷九七頁。なおこの問題については R. Schlesinger, Marx, His Time and Ours, 1950, p. 115. 高島善哉・本間要一郎訳上巻一五四頁参照。

(7) Marx, a. o., S. 551. 訳書八二八頁。

(8) Marx, Das Kapital, 3. Bd., S. 914. 訳書第三部一一一〇頁。

(9) レーニン著、飯田貫一訳『いわゆる市場問題について』(国民文庫)四二—四三頁。

(10) ア・アルズーマニヤン「プロレタリアートの貧困化にかんするマルクス・レーニン主義の理論の諸問題」経済評論昭和三十一年十一月号一四三—一四四頁。

(11) 同上二四二—二四五頁。

(12) Vgl. Marx, Das Kapital, 1. Bd., S. 680. 訳書第一部九九七—九九八頁参照。

(13) アルズーマニヤン、上掲一五七頁。

(14) なお絶対的貧困化の問題において考慮しなければならないいろいろの事情については左の論文を参照せよ。服部英太郎「貧困化論と独占段階におけるその特質」経済評論昭和三十一年九月号三頁以下。

ここにおいてわれわれは絶対的貧困化の問題にうつることとしよう。ロビンソンはこの問題についてつぎのように論じている。「ある章句で、マルクスは、生産力の増大が実質賃銀を引上げて、労働者が技術的進歩による成果のある分前をえることができることをみとめている。しかし『資本論』の論証は、かれをして、資本主義のもとで実質賃銀水準のいくらかの上昇傾向を期待するにいたらしめなかつたことは、あきらかなようにおもえる。一方、『共産党宣言』では労働節約的な技術の発達とともに賃銀が実際に低下することを予見している。だいたいに於いて事実はこの予見をみたさなかつた。」<sup>(1)</sup> またロビンソンによれば、「もつとも進んだ資本主義諸国では、実質賃銀水準はうたがいのなく上昇した。またとくにイギリスやスカンジナビア諸国では労働者と資本家との生活水準の差はいちじるしくせばまつたが、このことはある程度まですべての資本主義国でみられる。マルクスは資本主義が電気冷蔵庫やフォード自動車によつて労働者をどの程度まで買収できるかをみとおうさなかつた。……このように、労働者の『貧困化』というマルクスの予見はみたされなかつたようである。」<sup>(2)</sup>

これによつてみれば、ロビンソンは実質賃銀の水準についてかんがえ、資本主義諸国における労働者の実質賃銀水準の上昇をば理由として労働者の「貧困化」を否定しているのである。しかし前述のように労働者の貧困化は全体としての労働者階級の状態によつてしめされるのである。それはたんに実質賃銀の水準だけの問題ではない。またたとえ実質賃銀水準が上昇した事実があつても、このことによつてただちに労働者の貧困化を否定することはできない。なぜならば、その上昇は労働力の価値の上昇におよばないかもしれないのであつて、その場合には貧困化

の事実が存在していることになるからである。かくてロビンソンの右の議論はあまりにも早急な結論にもとづくものであるといいうるであらう。

しかしながら、問題はけつしてそんなに簡単なものではない。なぜなれば、マルクスもエンゲルスも、労働者の貧困化の事実として、賃銀の平均水準がその最低限に低下するかたむきがあることを指摘しているからである。マルクスは、『賃銀、価格および利潤』のなかで、資本の有機的構成の高度化にともなう産業予備軍の発生について説明したのち、いう、「近代の産業の発展そのものが、ますます労働者にたいして資本家のほうに有利に形勢を決定せざるをえず、またその結果として、資本主義的生産の一般的傾向は、賃銀の平均的標準をたかめるのではなくてこれをひくめ、いいかえれば、労働の価値を多かれすくなかれその最低限におしきげるにあるのである。」<sup>(3)</sup>

なおエンゲルスもつぎのようにのべている。「あたらしい経営に機械力と機械が応用され、そしてすでに機械を応用している経営で機械が拡充、改良されるにつれて、ますます多数の『人手』が仕事をうばわれる。そしてこれは、駆逐されたこれらの『人手』がふたたび吸収されて、この国の工場に就職口をみつげうるよりもずつと急速におこなわれる。駆逐されたこれらの『人手』は産業予備軍として資本に提供される。不景気のときには、かれらはうえて死んだり、人の慈悲にすがつたり、ぬすみをはたらいたり、救貧授産場に収容されたりすることもある。好景気のときには、生産の拡張にいつでもおうしえられるように待機している。そして、この産業予備軍をかたちづくる男女子供の最後のひとりが仕事にありつくまではこの予備軍の競争が賃銀をおしきげ、一方このような予備軍が存在すること自体が、労働との闘争において、資本の力をつよめている。」<sup>(4)</sup>かくてエンゲルスによれば、「労働力の価値を必要生活資料の価格に制限する法則、および労働力の平均価格をつうれいこの生活資料の最小限におし

さげるもうひとつの法則、この二つの法則が、労働者を車輪にはきんでおしつぶす、自動機の抵抗すべからざる力で、労働者にたいして作用している。<sup>(5)</sup>

ここにエンゲルスがあげている第二の法則はいわゆる絶対的貧困化の法則のもつとも顕著な場合をしめすものにほかならないであろう。

しかしわれわれはここで右のような貧困化があらわれる事情についてマルクスやエンゲルスがどのようにかんがえていたかについてしらべてみなければならぬ。これによつて貧困化の法則が作用する諸条件があきらかになるであろう。

まずマルクスの「資本制的蓄積の絶対的一般的法則」についてみるに、かれはいう、「社会の富、機能資本、その増加の範囲および精力が、したがつてまたプロレタリアートの絶対量およびかれらの労働の生産力が、大きくなればなるほど、それだけ産業予備軍が大きくなる。自由にしうる労働力は、資本の膨張力のばあいとおなじ諸原因によつて発展させられる。つまり、産業予備軍の相対量は富の諸力能につれて増加する。ところが、この予備軍が現役労働者軍に比較して大きくなればなるほど、固定的過剰人口、〔または〕その労働苦に反比例して窮乏する〔「労働者層」がそれだけ大量的となる。最後に、労働者階級中の窮乏層と産業予備軍とが多くなればなるほど、公認の被救恤窮民がそれだけ多くなる。これは資本制的蓄積の絶対的、一般的法則である。〕<sup>(6)</sup>

かくて、マルクスによれば、資本の蓄積につれて、相対的過剰人口としての産業予備軍すなわち「なかば就業し……またはまったく就業していない」労働者の相対量が大きくなり、それにもなつて固定的過剰人口と公認の被救恤の窮民が増加するといふのである。ここに固定的過剰人口といふのは相対的過剰人口の一つの形態である停滯



的過剰人口のようなものをさすのであろう。これは現役労働者軍の一部をなすのであるが、その就業はまったく不規則なものである。「かれらの生活状態は労働階級の平均的な標準的水準以下に低下するのであつて、他ならぬこのことは、かれらをして資本の独自の搾取諸部門の広汎な基礎たらしめる。労働時間の最大限と賃銀の最小限とがかれらの特徴づける。……かれらの範囲は、蓄積の範囲および精力とともに『人口過剰化』がすすむにつれて拡大する。<sup>(8)</sup>」それから被救恤的窮民は公けの救恤によつてやつと露命をつないでいるものであり、相対的過剰人口の最低の沈滞である。「被救恤的窮民は現役労働者軍の廢兵院であり、産業予備軍の死重である。窮民の生産は相対的過剰人口の生産のうちにくまれ、窮民の必然性は相対的過剰人口の必然性のうちにくまれているのであつて、窮民は相対的過剰人口とともに、富の資本制的生産および發展の一実存条件をなす。<sup>(9)</sup>」

なおマルクスのつぎの有名な章句も「資本制的蓄積の絶対的一般的法則」にかんする命題をうけついでのでられているのであつて、やはり産業予備軍、とくに窮乏層や窮民にかんするものであるとおもわれる。<sup>(10)</sup>すなわち「相対的過剰人口または産業予備軍をたえず蓄積の範囲および精力と均衡させる法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを、岩に釘づけにしたよりもいつそう固く、労働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。だから、一方の極での富の蓄積は、その対極では、すなわち、自分自身の生産物を資本として生産する階級の側では、同時に、貧困、労働苦、奴隸状態、無知、野生化および道徳的墮落の蓄積である。<sup>(11)</sup>」

しかしマルクスは、産業予備軍の存在が就業労働者にも大きな影響をおよぼすことを強調している。すなわち、かれによれば「予備軍がその競争によつて就業者に加える圧迫の増加は、就業者をして過度労働と資本の命令下への隷屬とを余儀なくさせる。<sup>(12)</sup>」かくて「失業者の圧迫は、就業者をしてより多くの労働を流動させることを余儀な

くさせる<sup>(13)</sup>」のであるが、このことは「個々の労働力の外延的または内包的搾取の増大<sup>(14)</sup>」を意味するのである。ところで、労働日の延長がおこるとき「労働日の延長とともに、労働力の価格は、名目的には不変であり、またはむしろ騰貴しても、その価値以下に下落しうる。」<sup>(15)</sup> また労働の強化にともなつて労働力の価格が増大しても、「労働力の価格増大は、この場合にはかならずしも、その価格がその価値以上に騰貴したということをもふくまない。それどころか、その増大は、労働力の価値（以下へのその価格の）低下をとともなうこともありうる。労働力の価格増大が労働力の速められた消耗をつぐなわない場合には、つねにそうである。」<sup>(16)</sup> これを要するに、これらの場合には、労働日の延長または労働の強化によつて賃金は労働力の価値以下に下落することとなるのである。

なおマルクスによれば、「労働者の就業、したがつてまた生活状態が、機械経営のもとでまぬかれない不確実と不安定は、産業循環の週期的変遷とともに正常的なものとなる。繁栄時代をのぞけば、資本家たちのあいだでは市場の個人的分前をめぐる猛烈きわまる闘争がおこなわれる。この分前は生産物の低廉さに正比例する。そのため生ずるところの、改良された、労働力に代位する機械と新生産方法との採用にかんする競争のほかに、賃金を労働力の価値以下に暴力的に引下げることによつて商品を安くしようと努力される時期が、その度ごとに生ずる。」<sup>(17)</sup> すなわち、好況期をのぞけば、産業予備軍の増大とともに労賃の労働力の価値以下への引下げがおこるのである。

かくて産業予備軍の圧迫によつて賃金は労働力の価値以下に下落するかたむきがあるということが出来る。そして不況期にはその最小限までおし下げられるであろう。しかしここで注意すべきは、この法則は未組織の労働者における傾向をしめすものであるということである。それは「未組織労働者の賃金をたえず絶対的な最小限にまでおし下げると一般的な法則」<sup>(18)</sup>なのである。

- 註 (1) Robinson, An Essay, p. 32. 訳書四四頁。  
 (2) Robinson, Collected Economic Papers, pp. 142-143.  
 (3) 『マルクスメーエンゲルス選集』第十一卷一〇二頁。  
 (4) 同上第十二卷四〇九頁。  
 (5) 同上補卷(2)五〇一頁。  
 (6) Marx, Das Kapital, 1. Bd., S. 679. 訳書第一部九九六頁。  
 (7) Marx, a. a. O., S. 675. 訳書九九一—九九二頁。  
 (8) Marx, a. a. O., S. 677-678. 訳書九九四—九九五頁。  
 (9) Marx, a. a. O., S. 679. 訳書九九六頁。  
 (10) これとおなじ解釈については、玉野井芳郎「カール・カウツキー」経済学説全集(河出書房刊)第八卷八二頁参照。  
 (11) Marx, a. a. O., S. 680-681. 訳書九九八頁。  
 (12) Marx, a. a. O., S. 670. 訳書九八五頁。  
 (13) Marx, a. a. O., S. 674. 訳書九九〇頁。  
 (14) Marx, a. a. O., S. 669. 訳書九八四頁。  
 (15) Marx, a. a. O., S. 551. 訳書八二八頁。  
 (16) Marx, a. a. O., S. 549. 訳書八二五—八二六頁。  
 (17) Marx, a. a. O., S. 476. 訳書七二八頁。  
 (18) 『マルクスメーエンゲルス選集』第十二卷四一九頁。

## 四

しかしマルクスはこのような法則に対抗して労働者の組織による闘争があらわれることを指摘する。すなわち、「資本の蓄積が一方では労働にたいする需要を増加するとすれば、他方では労働者の『遊離』によつてその供給を

増加するのであるが、それと同時に失業者の圧迫は就業者をしてより多くの労働を流動させることを余儀なくさせ、かくしてある程度では労働供給を労働者供給から独立させる。この基礎上での労働の需要供給の法則の運動は資本の専制支配を完成する。」だから、労働者たちは、「かれらがより多く労働し、より多く他人の富を生産し、かれらの労働の生産力が増加すればするほど、資本の増殖手段としてのかれらの機能すらもかれらにとつてますますおぼつかなくなるのはなぜにしかるかという秘密を察知し、」「かれらじしんのあいだの競争の強度はまったく相対的過剰人口の圧迫に依存することを発見し、」したがって「かれらは、かれらの階級にたいするかの資本制的生産の自然法則の破壊的諸結果を粉砕または微弱ならしめるために労働組合などにより就業者と失業者とのあいだの計画的努力を組織しようとする」<sup>(1)</sup>のである。

そしてマルクスは、労働組合による賃銀引上げの闘争が「賃銀制度からきりはなすことのできないものであり、労働が諸商品と同一のものとなつており、したがつて労働が価格の一般的変動を規制する諸法則にしたがうという事実そのものからおこるものである」<sup>(2)</sup>ということを強調している。いわく、「市場価格下落の段階と恐慌ならびに沈滞の段階では、労働者はまったく職をうしなわなないまでも、その賃銀をひきさげられるのはたしかである。だまされないためには、かれは、そのような市場価格の下落のさいにも、資本家にたいし、いかなる比例的程度で賃銀のひきさげが必要となつたかについてあらそわなければならぬ。もし、超過利潤のえられる好景気の段階で労働者が賃銀のひきあげのためにたたかつていなかつたならば、産業の一週期を平均してみても、かれはかれの平均賃銀、すなわちかれの労働の価値、さえもうけとらぬことになるであろう。……一般的に、すべての商品の価値は、需要と供給とのたえざる変動から生じる市場価格のたえざる変動の相殺によつてのみ実現される。現在の制度の基礎

のうえでは、労働も他の商品とおなじように一商品にすぎない。だから、労働もまた、その価値に相応する平均価格を獲得するためには、同一の変動を通過しなければならぬ。一方では労働を一個の商品としてあつかいながら、他方ではこれを商品の価値を規制する諸法則から除外しようとするのは、不合理であろう。<sup>(3)</sup>

かくてエンゲルスはいう、「労働組合の活動のおかげで、よく組織された産業部門の労働者は、その雇主に賃売<sup>(4)</sup>りした自分の労働力の全価値、すくなくともそれにちかいかいものをうけとることが可能となつていのである。」

それゆえに、エンゲルスによれば、「賃銀の法則は、労働組合のおこなう闘争によつて打破されない。反対に、それはこの闘争によつて有効になる。労働組合が提供する対抗手段がなければ、労働者は賃労働制度の法則にしたがつて当然うけとるべきものさえ、うけとることができないであろう。ただ労働組合という威嚇を目のまえにつきつけられたとだけ、資本家は、その使用人の労働力の完全な市場価値を支払うように強制されるであろう。<sup>(5)</sup>」しかし、右のことは、労働組合がその現在の組織によつてなしとげることのぞみうる極限である。しかも、それでさえも、たえまない闘争によつて、おびたしい力と金銭をついやして、はじめて可能なのである。「おまけに、生産の推移におけるすくなくとも十年に一回の動揺は、獲得されたいつさいのものを一瞬のうちに破壊しさり、そして闘争はもう一度はじめからやりなおさなければならなくなる。これは、出口のないどうどうめぐりである。<sup>(6)</sup>」

エンゲルスが「一八九一年の社会民主党綱領草案の批判」のなかでのべている左の章句は上述のようなかれの見解にてらして理解されるべきであろう。すなわち、「『プロレタリアの数と貧困とはますます増大する。』こういう絶対的ないいかたをすると、これはただしくない。労働者の組織、かれらの抵抗のたえざる増大、それらは、お

そらく貧困の増大にたいして、ある障壁をもうけるだろう。ところで確実に増大しているのは生活の不安である。<sup>(7)</sup>「  
 なお労働者の生活の不安についてはエルスナーのつぎの言葉をあげておこう。「資本主義時代の全経済生活が景気  
 発展の不断の上下運動に支配されているように、労働者の生活状態もまたそうである。かれは将来についてなら  
 現実的な計画をつくることはできないのであつて、かれじしんの老後にそなえることも、あるいはかれの子供たち  
 に安定した生活をきずいてやることもできない。なぜならば、かれのどんな見こみもつぎの恐慌によつてくずされ  
 てしまうからである。……労働者たちは、おそるべき疫病におびやかされるように、失業におびやかされる。失業は  
 低賃銀よりもいつそう悪い影響を労働者の生活状態におよぼす。」<sup>(8)</sup>」

さて現代においては労働者の強力な組織による闘争が歴史的または社会的要素として労働力の価値そのものに影  
 響をあたえるとなす見解がおこなわれている。たとえば、M・ドップはいう、「団結的行動じたいが『社会的要  
 素』の一部であり、そして労働者がみずからかちとつた成果は将来の『伝統的生活水準』を形づくる助けになるの  
 である。」<sup>(9)</sup> またJ・クチンスキーはつぎのようにのべている。「いま過去百五十年間にける資本主義の歴史を観  
 察するならば、つぎのよういことが出来るであろう。すなわち、労働〔力〕の価値の歴史的要素は、労働者側  
 のますますよく組織化された階級闘争の諸条件のもとに、増大する傾向をもつていふこと、これである。<sup>(10)</sup>」  
 さらにR・シュレジンガーによれば「労働力の価値、搾取率、等々を、労働組合の存在および実力、等々と無関係  
 にきまるものと規定することはできない。」<sup>(11)</sup> 労働者の組織が強化し、その闘争が強力となるにつれてこのような見  
 解があらわれてくるのはもつともなことである。

もちろん労働組合の経済的闘争には限界がある。それは資本制的蓄積の一般的法則を廃棄することはできない。

一般的法則なるものはその実現においてはいろいろの事情によつて修正をうけるかもしれないが、しかし止揚されはしないのであつて、ただそのために一般的法則はむしろ傾向として作用するのであるとかんがえられている。<sup>(13)</sup> かくて、エルスナーによれば、「資本主義的生産方法のあらゆる法則とおなじように、資本主義的蓄積の一般的法則もたえず間断なく効果をあらわすものではなく、それはただときどき暴力的に自己を貫徹するにすぎない。相対的過剰人口の法則は、ときどき（好況のさいに）産業予備軍の大部分が生産過程に吸いあげられるということを排除するものではなく、かえつて反対に、それを条件づけるものである。労働者階級の絶対的貧困化の法則は、ときどき（おなじく好況のさいに）労働賃銀が上昇すること、とくに労働者たちがかれらの組織のおかげで好景気の果実の分前を闘いとる力をもっている場合には、そうであるということ、排除するものではなくて、条件づけるものである。しかし終局的には資本主義的蓄積の一般的法則が自己を貫徹するのであつて、この法則が自己を貫徹するための媒介物たるものは恐慌である。」<sup>(14)</sup>

註 (1) Marx, *Das Kapital*, 1. Bd., S. 674-675. 訳書第一部九九〇—九九一頁。

(2) 『マルクス・エンゲルス選集』第十一卷九六頁。

(3) 同上同卷九四—九五頁。

(4) 同上第十二卷四二〇頁。

(5) 同上同卷四一四—四一五頁。

(6) 同上同卷四二〇頁。

(7) 同上第十七卷三七九頁。

(8) F. Oelsner, *Die Wirtschaftskrisen*, 1955, S. 115-116. 千葉秀雄訳一三九—一四〇頁。

(9) M. Dobb, *Wages*, 3rd revised ed., 1946, pp. 106-107. 氏原正治郎訳一一八—一二九頁。

ロビンソンと貧困化の問題 (三合)

- (10) J. Kuczynski, Die Theorie der Lage der Arbeiter, 3. Aufl., 1955, S. 77.
- (11) Schlesinger, op. cit., p. 115. 訳書一五四頁。
- (12) Vgl. Marx, Das Kapital, I. Bd., S. 679. 訳書第一部九九六頁参照。
- (13) Marx, Das Kapital, 3. Bd., S. 262. 訳書第三部三四二頁。
- (14) Oelssner, a. a. O., S. 115. 訳書一三九頁。

## 五

これまでの考察によつて、マルクスの絶対的貧困化の法則がどのようなものであるか、またそれがどのような条件のもとにおいておこなわれるかがあきらかになつたとおもふ。

ところで、ロビンソンはつぎのように主張する。「マルクスの議論は、近代において実際におこつた実質賃銀の上昇と調和せしめらるべきであるならば、修正を要する。マルクスの主張するところは、労働予備軍の機構が賃銀をば資本主義体制の存続を許容する限界内におさえるということである。生産力の増大は資本主義のゆるしうる賃銀の最高限をひきあげる。労働組合の勢力の増進は賃銀をこの最高限におしあげる傾向がある。他方、独占による対抗力が賃銀をその限界以上にあげないようにする。……このようなマルクスの議論の修正はもとの定式化の簡素な単純さをそこなうであらう。」<sup>(1)</sup>

かくて、ロビンソンによれば、絶対的貧困化の法則は廃棄されることになるのであるが、「厳密な生存水準の理論が放棄されるやいなや、それ〔マルクスの賃銀論〕は総生産物の労資間における分割をなかが決定するかという中心的な問題にたいして明確な解答をあたえない。」「実質賃銀の率は、階級闘争の情勢の変化につれ最低限と最高



限とのあいだをうごくが、最低限は漠然と生存水準によつて限定され、最高限はまったく限定されない。いかなる時点においても搾取率は実質賃銀と総産出量との差額によつて決定される。しかし、搾取率が労働生産力の増加にもなつて増大するという一般的な推測をべつとして、その動向を支配する法則は存しない。アカデミックの理論も……これとおなじような有様である。もし階級間の所得の分配を支配する法則があるとすれば、それはまだ発見されてい<sup>(2)(a)</sup>ないのである。」

しからはロビンソンじしんはいかにしてかかる法則を発見しようとするのであろうか。

註(1) Robinson, An Essay, pp. 32-33. 訳書四四—四五頁。

(2) Ibid., pp. 33-34. 訳書四五—四六頁。

(3) N・カルドアもロビンソンとおなじような見解をのべている。いわく「かれ〔マルクス〕の最も重要な命題、すなわち労働階級の生活状態の恒常的な悪化——プロレタリアートの貧困化——は、資本主義の『競争的』段階と『独占的』段階とのいずれにおいても、経験によつて反駁された。マルクスのモデルにおいては、産出量における賃銀の分前は一人あたりの産出量の増加するごとに必然的に低落せざるをえない。その理論は、資本家にたいして、搾取度をへらし労働者に『剰余価値』の一部をひきわたすことを強制するところの、労働階級の団結的組織の結果としての、商品で測つた賃銀の上昇をば、考慮しうるのみである。しかしながら、この仮説は、団結的組織の増大による労働の交渉力の増加率が一人あたりの産出量の増加率と歩調をあわすという極端な仮定にもとづいてのみ、不変的な賃銀の分前を生ずるでせぬ。」(N. Kaldor, *Alternative Theories of Distribution, Review of Economic Studies*, Vol. XXIII(2), No. 61, 1955-56, p. 88.)